

持論を“伝える”



平成 29 年度 校内弁論大会

H29・12・4

本年度も、この行事には保谷第二小学校6年生の皆さんが参観しました。とても真面目な参観態度で、しっかりと弁論を聞いていました。この取組は実に四年目を迎えています。至近にある保谷第二小学校からは本校への進学率が高く、平成 26・27 年度は言語活動を基軸とした小中連携をテーマに西東京市の研究指定を受けて取り組んだ経緯から、「小学校で取り組んでいる、『発表した意見を友達に聞いてもらってアドバイスをもらい、内容を深めていく』という流れを中学校でも受け継いで、弁論の内容を磨き上げ、聴衆に伝わるように自信を持って発表する。」という取組を継続しています。この取組の効果が現れてきているのか、今年の弁論は一年生から三年生までどれも内容がしっかりと構築されていて、そのテーマや中身は様々ですが、根拠を持ち筋道を立てて、論理的に伝えるということができていたように感じました。



平成 29 年 12 月 11 日
 西東京市立柳沢中学校
 校長 西嶋 剛昭
<http://www.nishitokyo.ed.jp/j-yagisawa/>
 (カラー版がホームページでご覧になれます)



本年度 各弁論のテーマと概要

キラキラネームをつける親	「子どもは名前を選べない」……独自の切り込みからはじまり、キラキラネームの弊害を訴えると同時に、名前の意味を大切にしたいという気持ちがにじみ出た弁論。
保健所は必要か	殺処分について、客観的な事実を踏まえて訴え、命を扱う責任を聴衆に問いかけると共に、里親制度の紹介など、保健所が担わざるをえない殺処分の現状に一石を投じた。
夏休みの宿題について	ストレートにテーマの功罪について言及した。最後は、宿題があるべきかどうかというレベルの話題から、それを自分のためにどう活用していくかという内容に高めた。
歩きスマホの危険性について	自らの経験、実例を提示しながら、まずは持論をしっかりと展開した。解決の糸口が見えない社会の大きな問題に真っ正面から取り組み、マナーやモラルの考え方にもつなげた。
6年たった今、被災者の現状とは	東京オリンピックメイン競技場の建設費用を調べ、未だに仮設住宅から出られない方々への支援の在り方などを論じた。孤独死など高齢者問題への言及も見られた。
地球は一つの家族	グローバル化に関する持論を展開する中で、好ましくないグローバル化に弁論の世界を広げて具体的に論じ、問題提起を行った。
目標をもつこと	他者の論じた資料なども、具体的数字と共に根拠として挙げて持論を進めた。またその進め方も一つ一つ段階を経て、説得力ある弁論を展開した。
「人」という字	「人という字は、支え合っていることを表しているのではない。」このことを様々な事例を示して論じながら、「感謝」という大きなテーマにつなげ、独自の見解を示した。

言語活動のさらなる充実 ～次年度に向けて～

この弁論大会を生かすにはどうすればよいか。ありきたりな切り口で恐縮ですが、せつかくの機会なのであえて考えてみてください。

一つは、どんな意見であれ、とりあえずは自分の引き出しに入れておく、というものです。それを今すぐに生かすかどうかはさておいて、引き出しは増やしておく。

9月13日付の朱雀「人の考えというもの」で紹介した次の文章を、もう一度読んでみてください。



考えを豊かにすると、人生、楽にすごせるようになる。多くの引き出しを持っていると、いつもその時のベストを容易にチョイスすることができる。



自分の考えを貫くのもそれはそれで立派なことだ。が、ある時、それではつらい。同様に、こうあるべきとか、こうあらねばならないという考えが強固すぎるとますますつらくなる。

もともと、考えに優劣も善悪も存在しないのだから、自己の考えを絶対正義と我を張ることに力を注ぐのはもったいない。その時間も、もったいない。もっと別のことにその力を使ったほうが、にこにこして過ごせる。

まったく陳腐な結論だが、いろいろな考えがあり、いろいろな考え方があっていいということだ。

その考えのひとつひとつを、正しいかどうか検証していくよりも、みんなひっくるめて自分の引き出しの一つにすればいい。どれを引き出すかチョイスし、それを引き出すかどうかを判断するのに、前述の基準があればいい。



保谷二小6年生の皆さん

もう一つは、「論じられた考えを右から左へ流すのか、自分なりの考えを持って自問自答してみるのか。」ということです。

全校生徒がこの弁論を聞き、聴衆として参加して考えることで、大会は成立します。そんなとき、「関心のないテーマだから」「話を聞くのは苦手」「他人の意見など聞いても意味なし」というように、ただ時間が過ぎるのを待っているのはどうでしょうか。

東洋経済オンラインの記事に、「同じ授業を受けていても差が生まれるのは当然」というのを見つけました。その論説は、「同じ授業を受けているのになぜかできる人がいる。その人は、勉強以外の時間も学んでいる」と続いています。

それによると、人は、

- ①授業を受けていても学んでいない人
- ②授業だけが学びの人
- ③寝ている時以外の日常すべてが学びの人

この3つのタイプがあって、

「たとえば、家から駅までの間を歩いている場合でも、普通は大きな変化がなければなにも気付きませんが、③のタイプの人は非常に多くの気づきを得て、そこから考えたりするのです。ですから、得られている情報量が①や②のタイプの人とはまったく異なります。」と書かれていました。

「学び」という言い方が固い気がしますが、要するには、目の前に起こる事象すべてに興味を持ち、それを右から左に流すのではなく、その一つ一つに自分の意見を持つこと、ただそれだけのことで差が出るのだというのです。



発表した各学年の弁士たち



校長先生のお話も、いわば弁論(?)

さて、みなさん。弁論大会を経て、持論を磨き上げる取組を重ねていると思います。この朱雀にも、上記二つの考えが論じられていますが、このことに対して何かを考え始めた人は、持論を持つことに興味を示し始めた人と言えるのではないのでしょうか。弁論に限らず、眼前に現れる事象を意味のあるものにするのは、自分に度量の深さとか謙虚さがあるかによります。自分を高めるために、全ての事象に意義を見いだせる人に成長できるといいですね。次年度、また素晴らしい弁論を、そして聴衆としての成長も併せて期待しています。